

令和元年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部
鹿児島県知事表彰 優秀賞
国土交通事務次官賞

「 平和の平成、防災の令和 」

鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 2年 後藤 愛梨

「平成」から「令和」へ。私たちにとって平成はどのような時代だったのでしょうか。

「平成」は、日本が一度も戦争をしなかったとても平和な時代であったといえるでしょう。その一方では、自然災害のとても多かった時代でもあったといえるのではないのでしょうか。東日本大震災や熊本地震といった地震災害。平成30年西日本豪雨災害や平成29年九州北部豪雨災害といった大雨による災害。御嶽山噴火といった火山災害。いずれも平成を代表する自然災害です。記憶に新しいものは「8・6級」と言われた、今年の6月から7月にかけての鹿児島の大雨です。しかし、実際は、今挙げた以上に多くの自然災害が日本各地で起き、大勢の人の命が失われてしまいました。しかし、私も含め私たちの多くは、その事実を知らなかったり、たとえ知っていたとしてもそのうち忘れてしまったりするかもしれません。今回の鹿児島の大雨で「8・6級」という強い文言が用いられたのは、その時の記憶を思い出し、県民が命を落としてほしくないという思いがあったからだそうです。

自然災害というものは、昔から何度も何度も繰り返し起きてきました。その度に、多くの命が失われてきました。そのような人命を奪う自然災害だからこそ、昔の人々は、二度と犠牲を出すことがないようにという願いを込め、自然災害の記録を「自然災害伝承碑」として後世へと残してきました。しかし、その願いが私たちに届いているかということ、悲しいことにそのことを認識していない人の方が多いのが現状です。事実、平成最悪の豪雨災害と呼ばれる平成30年西日本豪雨災害において、特に大きな被害が出た広島県坂町には豪雨災害を伝える「自然災害伝承碑」がありましたが、それを認識している住人はわずかであったといえます。また、私たちが住む鹿児島にも「大正噴火」、「8・6豪雨」、「針原」など16の基があるそうです。しかし、私たちのほとんどがそのことを知りません。

そんな事態を変えようと、日本地図を作成している国土地理院は、過去の自然災害の記録を刻んだ各地の石碑や供養塔の場所が一目で分かるよう、「自然災害伝承碑」の地図記号を新たに制定すると発表しました。地元の防災地図をつくる学校の授業や街歩きなどに利用してもらい、過去の教訓の普及と将来の被害軽減につなげるのが目的だそうです。「自分の命を守るのは自分だけ」被災者や防災関係者にはそのように言う方も多くいます。「自然災害伝承碑」の地図記号制定を機に、昔の人々が私たちに伝えようとした自然災害の教訓を正しく知っていきたいと思います。そして、自然災害への備えを充実させ、いざというときに自分の命はもちろんのこと、周りの大切な人たちも守れるようになりたいです。

「令和」には、「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という意味があり、「厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人一人の日本人が明日への希望と共に、それぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたい」という願いが込められています。

私たちの地球は、地球温暖化により二酸化炭素などの温室効果ガスの増加で地球と宇宙の熱の調和が崩れ、気温が高くなっているのも災害が多くなった原因だといわれています。平成の自然災害の教訓を一つの糧に、私たちの生活でも、地球温暖化の進行を防ぐために今何ができるのかを考え、自然と上手く付き合いながら、自分の自己実現を叶えたいと思います。

「平成」から「令和」へ。今の時代は将来、必ず振り返られます。だから、100年後の人たちのためにも、これまでの災害に私たちが何を感じ、どう動いていくのか、しっかり考え、残していけるようにしたいです。また、これまでの言い伝えを生かして、明るい時代を私たちが創っていきたいです。